

作詞少女

日 仰
向 木

番外編

カリフォルニアの道端にて



2018 COMITIA125 頒布コミ本

「……もう、ホントうんざりですわ…」

「だな。つたくこのポンコツは」

「そうじゃありませんわ。貴女と！ 貴女のその

最低の運転に文句を言ってるんですのよ！」

頻繁にエンストするオンボロ車をガスタンドに停めた私達は、給油がてらスタンドの屋根に隠れて休憩する。強い日差しの7月。エアコンがほとんど効かないこの車でこの先の旅をするという事実に、私は目眩がする。…そして吐きそう。車酔いで。

「おいおい、まさかお前、このアタシのドライブングテクニクにケチをつけようつてのか？ 教習所でも実技試験1発OK、この教習所始まって以来の怪物だ」と言われたこの伊佐坂詩文様の運転を？ 冗談だろ？」

「1発OKじゃなくて1発KOの間違いじゃあり

ませんこと？ 怪物つて、それ悪い意味に決まってますわ。急停車に急発進に急ハンドルに…こんな乱暴な…ウップ」

「しかしこの空の広さよ！ 日本じゃこの開放感はお目にかからねえよなあ！ 見ろよ音々、この抜けるような青いグラデーション！ カラツとした陽気！ そしてエアコンがぶつ壊れてるポンコツ車！ 夏の旅つて感じでいいねえ。おい、聞いてんのか？ つたくよー、青鬼財閥の令嬢ともあろうものが道端でゲロなんておしとやかじやないんじやなくつてデスワだろ？」

「ふざけた喋り方したらぶん殴りますわよ。吐いてませんわ。でも…いいから、ちよつと…もうちよつと酔いが覚めるまで待つて…」

「つたーく、だらしねえなあ」

「誰のせいのですの…」

「はいはい。わかつたよ」

——アメリカはカリフォルニア。ロサンゼルスから北上し私の伯父様の家を目指す道中。この乱暴な女——伊佐坂詩文との旅は、始まつて3日ほど経っている。しかし私はもう後悔で一杯。

そもそも、普段まともな送迎車にしか乗つたことのない私にとつて、このアンティークなワーゲンバスとかいう（詩文がポンコツキャラバン号と名付けその名に偽りのない鉄クズにタイヤがついてるだけみたいなゴミ同然の）ワゴン車での長距離ドライブはかなりキツイ。せめて車がロールスロイスならまだマシだったんだけど……でも、そんなことを言つたら、またこの無礼者に『これだから世間知らずのお嬢様は』とか言いわれそうですわね。

「おい、音々」

「……なんですの？ だから、もうちよつと待つて……」

「ちげーよ、ほら、ゲータレード。さつき自販で

買つといたやつ。飲めよ。このへんまだしばらく自販ねーから」

「あ、どうも……ありがと……ぬる。……自販機がないつてなんでわかるんですの？」

「電線がねーからな」

「ああ……なるほど……」

見渡すまっすぐな国道。波打つような丘の草原に、草の生えていない砂漠地帯。まさに、ただの広い場所にいる私達の視界に、電気を供給する電線はたしかに見当たらない。受け止めきれないような大きな空と、道だけがある。

詩文から受け取つたスポーツドリンクのキャップを開けて飲みつつ、喉の潤いとともに少しマシになる車酔いを感じながら、私は改めて、この旅についてと——この女、伊佐坂詩文について考えている。

：エリートコースに未練があるわけじゃない。けどこの先に、一体何があるのか。こいつが見ているものがどうしても気になってしまった私は、たつたそれだけの理由であらゆるものを捨てていまここに居るわけだけど、考えれば考えるほど正気じゃない。どう考えてもやつてゐることは支離滅裂ですわ。自分のことながら。：けど、正体不明の私の直感が、この選択をさせている。

：しかし、謎ですわ。こいつの旅の目的。

「ねえ詩文」

「なんだ」

「暑いですわね」

「おう」

「：貴女が言ったこと、正直凶星でしたわ」

「ん？ なんの話だ」

「『良い音楽とは何か、せいぜい他人に決めても

らえよ』つていう、貴女の無礼千万な腹立たしいあの捨て台詞のことですわ」

「ああ。そりゃ凶星だろうよ。実際そうだったんだから」

「でも、わかつてるんですの？ 世界最高峰の国際コンクールですよ？ あなたこの意味わかつて言つてるんですの？」

「お前こそ意味わかつてるのかよ」

「……わかつてますわ」

「なら説明してみてくれよ。そのコンクールとやらには一体何の価値があるんだ」

「そこで勝つことが、私の実力の証明になりますわ」

「なんで証明する必要があるんだ？」

「：は？ いや、それは……証拠がないと、ただの妄言になってしまいますわ」

「数値で測れるスポーツならそうだろう。けど音楽……芸術はそうじゃないだろ。なんで証拠なんか

いるんだ？」

「……だから、証拠がないと、独りよがりになるでしょう」

「お前より音楽の本質をわかってない大勢に褒められたとして、それはその証拠になるのか？」

「……………」

「どうなんだよ」

「他人に認められるという、証拠になりますわ」

「なるほど。じゃあ、お前が一番欲しいものはそれってことでいいのか？ 本当にそれでいいのか？」

「……いや、そういうわけじゃ……」

「……お前のトランペットはとてつもなく凄いですよ。お前もそれを自分で知ってる。ただしコンクールとかなんとかそんな場所でも馬の骨供に価値を認定されることが大事だとかもしも言うなら、それについては酷く不自然だ。一体何の意味があるんだよ。お前は何を望んでいるんだ？」

「……何を……」

「お前がラッパを吹く目的が、ブレブレだつて言ってるんだよアタシは。本物だし、本当のところは全部わかってるくせに、なにやってんだか、お前ほどのやつがよ。バカみてえだつて言つてんだ」

……………

「いや、貴女の言つてること、まだよくわかりませんわ」

「わからねえのか、それともわかりたくねえのか、どつちなんだろうな。簡単なことしか話してねえよアタシは」

「そうかしら？ 難解だと思ふけれど……でも、たしかに。私はまだブレブレですわね」

詩文は、汗をかいている私に、車内にあつた麦

わら帽子を持ってきては乱暴に頭に押し付け
つ、言う。

「わかりにくく言うぞ。お前が相手だしな」

「え……？」

「全部な、確認なんだよ。お前は多分、確認の順
番を間違えてるんだ」

「確認？ ……の、順番？」

「確かなことには順番つてもんがあるんだ。不安
定なものを柱にしたら、永遠に迷い続けることに
なる。…たとえばな、これは極端な話だが。アタ
シはここに来るまでアメリカ合衆国なんてものが
そもそも存在するかどうかを疑っていた。しか
し、アタシはようやく足を踏み入れて実際にその
土を踏んで、なるほどアメリカ合衆国カリフォル
ニア州は存在するんだなということを確認した」

…何の話をしているのかしら。

「それは、とんでもない疑り深さですわね」

「アタシは、まず不確かなこと、思い込みについ
てを徹底的に検証している。そうじゃなきゃ自分
つてものがまだまだ洗脳だからかな。『常

識』、『思い込み』、『自分にとつて都合の良い
解釈による湾曲』そういうろくでもねえ、自分騙
し_しが心の中ではいくらでも起こる。これだけ強く
意識してるアタシでもだ。だから、まず確認する
んだ、あらゆることを。どんな些細なことも、な
るほど確かだと知って、そこで初めて考える土
台_台が出来上がる」

「やたら達観してる貴女にも、まだ不確かなこと
なんてあるんですのね」

「いくらでもあるよ、そんなもの」

「確かなことなんて、そもそもあるんですの？」

「ある」

…詩文は静かに囁く。でもその言葉は私にとつ
て、どこかとても印象深く刻まれる囁きだった。

「アタシはそれを『オセロの角』と呼んでいる」

「へえ、オセロの角……？」

「絶対に色が変わらず、普遍的にそこにある確かなこと。真理というやつがあるんだ。そのうちのいくつかをアタシはもう知っている。けど、まだ全部じゃない。全部でいくつなのかもわからない。けど、もしこれを全部知ることが出来たら、そのとき、盤面のすべての迷いの全体像をアタシは把握することが出来るだろうということは、なんとなくわかる」

「……………」

「それが出来たら、アタシはようやく、人にものを伝える人間として一人前になれる。いまのアタシはまだ足りねえんだ」

そう言つて詩文は、余計なことを言つてしまつた、というような顔をして、ポンコツキャラバン号の中に引つ込む。さっきの話と今の話が、一体どういう繋がりがあるのか、私は考える。けれ

ど、わからない。どうやら私はまだ詩文よりも思考の研鑽が足りないということは間違いないようだった。でも、必ず理解してやりますわ。

~~*~*~*~*~*

酔いが覚めた私は、ポンコツキャラバン号の後部座席で何か文字を書いている詩文を見つける。

「何を書いているんですの？」

「ん？ ……ああ、友達に絵葉書を送ろうと思つてな」

「貴女みたいな人に友達がいるなんて、驚きですわ」

「そうだな。アタシも驚きだ」

詩文は、こつちを見ずに手紙に住所を書いていく。そして、呟く。

「……これもな、アタシの確認なんだ」

「…?」

その意味を、詩文は詳しく語ろうとはしない。きつと、聞いても答えは語ってくれないだろうと思う。そんな気がする声色だった。

「ねえ、その方の話、聞かせてくださらない?」

「はは。つまんねえやつだよ」

乾いた声。少し小馬鹿にしたような。けど、それを上書きするように詩文は言葉を続ける。

「…でも、最高なんだぜ」

「へえ。聞きますわ」

「…あいつと出会ったのは、たしか——」

詩文は、嬉しそうに微笑んだあと、少し誤魔化しながら、懐かしそうに話し始める。詩文の心に迫った、とある一人の後輩のことについて。

○あとがき

こんにちは、仰木日向です。これを書いているのはコミティアの前日夜23時です。まつだひかりさんが明日のコミティアの準備をしている様子を作業通話で聞いている時に、なんか羨ましくなって、「いいいいいなあ」と言っていたら、御厚意でスペースに委託本を置かせていただけることになりまして、勢いで書いたのがこちらの短編でございました。内容は、いつか必ず書こうと思っている詩文のその後の物語、アメリカで出会う詩文と同格のスベックを誇る宿敵・青鬼音々(あおきねおん)との一件を描くスピノフ『カリフォルニア・ネオンライト』の一部のシーンを切り取ったものです。

同作は作詞に関する技術理論書としてはテーマが大きく逸脱しているので、おそらくヤマハさんから出すことはないだろうと思いますが、そのかわりコミティアや、なにか別の形で書いてまどめたいと思っっているものではありませんので、いつかどこかのタイミングでこのお話を読んでいただけたらいいなと思いつつ、今日はこの辺りで失礼いたします。仰木日向でした!

F I N

サークル 練馬DTM研究所

著者 仰木日向

発行日 2018年8月19日

印刷 セブンイレブン練馬北口店